

道元禪師の法華經

川 口 惠 隆

「弁道話」に「宗門の正伝にはく、この単伝正直の仏法は、最上のなかに最上なり。参見知識のはじめより、さらに焼香・礼拝・念仏・修懺・看經をもちるず、たゞし打坐して身心脱落することをえよ」とあり、また「読經・念仏等のつとめにうるところの功德を、なんぢしるやいなや。たゞしたをうごかし、こゑをあぐるを仏事功德とおもへる、いとはかなし」とある。これは只管打坐以外の修法は宗門の正伝ではないとの意である。

ところがおなじ「弁道話」に「とうていはく、あるいは如来の妙術を正伝し、または祖師のあとをたづぬるによらむ、まことに凡慮のおよぶにあらず。しかはあれども、読經・念仏はおのづからさとり因縁となりぬべし」とある。これは經典読誦がさとり因縁になるといつているわけである。

經典読誦にかんする、この矛盾とも考えられる「弁道話」の相反する見解は、「春の田のかへるの、昼夜になくがごとし」という有名な言葉とともに、どちらかといえば經典読誦

に否定的な道元禪師の立場が強調されがちであるが、『正法眼蔵』全体では、むしろ読誦がさとり因縁になるという後者の考えかたのほうに傾いている。たとえば「經卷これ法性なり、自己なり。知識これ法性なり、自己なり。法性これ知識なり、法性これ自己なり。」（法性）、また「經卷は如来全身なり、經卷を礼拝するは如来を礼拝したてまつるなり。經卷にあふたてまつるは如来にまみえたてまつるなり。」（如来全身）等々とあり、その他「仏性」「見仏」「海印三昧」「古鏡」「授記」「看經」「仏經」「発無上心」等々の卷に、經典読誦に肯定的な見解がみられる。

読誦經典の意義をこのように意図していた道元禪師が、經典のなかにおいては、法華經をもっとも重視したことはひろく知られているところで、『眼蔵』中に法華經讃歎のことばがおおく投げかけられていること、『眼蔵』に引用された經典中では法華經が群をぬいていること等と併せ、禪師と法華經との関係はきわめて濃厚であるといわねばならない。あらた

めて『眼蔵』中に引用された法華經句を私的に調査してみると、九十一句が検索され、それらは百四十箇所にわたっている。ここに品ごとの数だけを列挙しておく。

序品 六句 方便品 二十四句 譬喩品 四句 信解品 四句
藥草喩品 二句 化城喩品 一句 五百弟子受記品 二句 授學
無學人記品 一句 法師品 七句 見寶塔品 二句 提婆達多品
二句 安樂行品 七句 從地涌出品 二句 如來壽量品 十一
句 分別功德品 一句 隨喜功德品 一句 常不輕菩薩品 一句
如來神力品 二句 藥王菩薩本事品 一句 觀世音菩薩普門品
三句 陀羅尼品 一句 妙莊嚴王本事品 一句 普賢菩薩勸發品
四句

（以上は『正法眼蔵』に引用された品別法華經句数）
これらのなかで、「法華轉法華」巻などはあたかも禪と法華とが相即しあつた世界であるから、その引用回数はこのかぎりではない。ともかくも禪師は何故にこれらの法華經句をおおく引用されたのであろうか。これによつて道元禪師は何を説こうとされたのであろうか。道元禪師にとつての法華經とはいつたどういう意味をもつものであろうか。

まず道元禪師が使われた法華經句は、どのように使われたかについてみてみると、法華經は禪の世界へ導くための方便としての意図を感じることができる。たとえば、

いはゆる如來道の「本末究竟等」は、諸法実相の自道取なり。

闡梨自道取なり。一等の参学なり、参学は一等なるがゆゑに、「唯仏与仏」は「諸法実相」なり。「諸法」「実相」は「唯仏」「与仏」なり。「唯仏」は「実相」なり、「与仏」は「諸法」なり。「諸法」の道を聞取して、一と参じ、多と参すべからず。「実相」の道を聞取して、虚にあらざと学し、性にあらざと学すべからず。「実」は唯仏なり、「相」は与仏なり。「乃能」は「唯仏」なり、「究竟」は「与仏」なり。「諸法」は「唯仏」なり、「実相」は「与仏」なり。諸法のまさに諸法なるを唯仏と称ず（唯仏与仏）

ここには禪師の世界が踊つているという感がつよい。道元禪師の自在な解釈がほどこされ、「諸法」と「実相」と「唯仏」と「与仏」という四句が渾然一体となつて溶解しつつ、互いが相即の関係性のなかで働きあつている世界——まさに道元世界としかいいようのない世界の自由なうごめき、あるいはこれが「禪」の世界かと思われるような闊達なうごきを感じることができる。こうした例は『眼蔵』中に多数みることができ（紙数の関係で省略）。

次に指摘されることは、道元禪師が法華經に重要な意味をもたせようとした意図をくみとることができることである。法華經は、天台大師の分類によると、一は方便品を中心とした迹門部門で、「宇宙の統一的真理」いわゆる一乗妙法と説かれるところ。二は本門部分で、壽量品を中心とした「久遠の人格的生命」いわゆる久遠の本仏と説かれるところ。田村芳

朗先生著『法華經』は、天台大師の二分類をさらに三部門にわけて考え、法華經はその第三部門にあたる「現実の人間的活動」いわゆる菩薩行動を説くところに本来の意味があると指摘された。

道元禪師が法華經中とくに重視したのは方便品で、その引用数の多さがこれを裏づけよう（そのなかでも「唯仏与仏」「是法住法位」「諸法実相」などは五回以上の引用である）。方便品は、いうまでもなく天台大師の分類によるところの迹門部分の重要なポイントだが、道元禪師の只管打坐の世界が第一部門の「唯仏与仏」の宇宙の真理とは何かということにつながることはいうまでもない。

道元禪師は、そもそも法華經を宇宙の真理そのものとして捕らえられたというべきなのだが、その世界は要するに「唯仏与仏」の世界と考えられるものである。しかし法華經にとって、唯仏与仏は結論としてでてくる句ではない。むしろ出発点にすぎないといったほうが当たっている。方便品以下の品々にこそ法華經本来の意味は説示されていくわけで、天台のいう第二部門ないし田村先生説かれるところの第三部門こそが、法華經の法華經たる所以と解すべきであろう。もし法華經が唯仏与仏の世界観に留まっているとするなら、法華經の存在理由はなくなってしまうかねない。道元禪師が「唯仏与仏」に拘泥したのは、そこに禪者としての立場があると

観ぜられるのである。

これらをふまえて『正法眼蔵』のなかの編「法華転法華」の巻を読んでみると、そこには法華經に対する禪師の考えが、はつきりと示されていることがわかる。これは六祖慧能の説いた偈に、

心迷法華転、心悟転法華。誦久不明己、与義作讐家。

無念念即正、有念念成邪。有無俱不計、長御白牛車。

《心迷へば法華に転ぜらる、心悟れば法華を転ず。誦すること久しくして己を明らめざれば、義と讐家と作る。無念の念は即ち正なり、有念の念は邪と成る。有無俱に計せざれば、長く白牛車に御せん。》

この句をもとに道元禪師は「法華転法華」の思想とは何かについて述べ、「法華転」とは心迷のことで、これは一般の經典解釈といつていいもの。そうではなくて「転法華」として心悟の状態となつて、經典にあやつられることなく、自己の精神のなかで經典を咀嚼しなければならぬと言われた。その立場が「法華転法華」の巻においては、詳細に説かれていくのだが、その末尾に「いまの法華、かならず法華の法華果あらん。釈迦の法華にあらず、諸仏の法華にあらず、法華の法華なり。」とある。この「法華の法華」とは法華が法華を説くことである。法華以前に法華があつて、その法華が法華を説くということにはかならない。これは法華經全体を貫く思

想であり、法華經一部の説相そのものの姿と云う。道元禪師のいうその根底にある法華は、やはり法華以外からでてくるはずもない。宇宙の全存在は法華しかないという観点がそこにかがうことができる。だからこそ道元禪師は「法華転法華」という六祖慧能の言葉を踏襲したわけである。しかもその世界観の根底が「唯仏与仏」を一步も離れた世界であることもまた道元禪師の立場としてあるわけである。

道元禪師は帰国後の出発点において、女性や在家の出家を容認していたことは「弁道話」に「仏法を会すること、男女貴賤をえらぶべからず」あるとおり。しかるに後には「しるべし、身心もし仏法あるときは、在家にとゞまることあたはずといふことを。諸仏祖みなかくのごとし。出家すべからずといふもがらは、造逆よりもおもき罪条なり、調達よりも猛悪なりといふべし」（三十七品菩提分法）、「三世十方諸仏、みな一仏としても、在家成仏の諸仏まします。過去有仏のゆゑに、出家受戒の功德あり。衆生の得道、かならず出家受戒によるなり。おほよそ出家受戒の功德、すなはち諸仏の常法なるがゆゑに、その功德無量なり。聖教のなかに在家成仏の説あれど正伝にあらず、女身成仏の説あれどまたこれ正伝にあらず、仏祖正伝するは出家成仏なり」（出家功德）等々であるように、男女・在家の出家を完全否定している。

一方で女性の成仏を説き、在家の得道を説きながら、一方ではこれらを完全否定している道元禪師のこの矛盾を、どのように解すればいいだろうか。いうまでもなく法華經は女性の成仏を説き、在家主義を主張する經典である。さきについて第二・第三部門にそれらが説かれたことよって、法華經の法華經たる意義もでき、ひろく信仰をあつめることもできた。禪師が第一部門に留まるかぎり、男女・在家などの得道は眼中からでていかざるをえなかった。くわえて禪者としての厳しい出家主義とあいまって、禪師の立場からは、出家主義に留まらざるをえなかったと考えられよう。

このように法華經を重視しながら法華經本来の意義から遠ざかつていったところに、私たちは禪師の矛盾をみないわけにはゆかないのだが、同時に禪者の行き詰まりをも感じてしまうのである。

（キーワード） 道元禪師、法華經、唯仏与仏、法華転法華

（関西大学大学院修了）

41. The Lotus Sutra and Dōgen

Eryū KAWAGUCHI

42. *Shōbōgenzō hokketenhokke* and *Rongi*

Takao ISHIJIMA

In the “*Shōbōgenzō hokketenhokke*” (正法眼藏, 法華転法華) we find the expression “*yokuryō shujō kai ji go nyū*” (欲令衆生, 開示悟入). It has been thought that Dōgen (道元) quotes this expression from the “*Hokekyō hōben-bon*” (法華經方便品). However, I wondered about this, and investigated a number of sources. As a result, I believe that Dōgen (道元) quoted this expression from the *Shoulengyan yishuzhu jing* (首楞嚴義疏注經) of Zixuan (子璿).

43. Nichiren Shōnin's Propagation of the *Lotus Sutra* through his Writings

Gyōkai SEKIDO

Nichiren's attitude was to vigorously promote his ideas. Focusing on engaging in as much communication as he could with his followers, he was a prolific letter writer, thus producing a great volume of writings. A collection of about 280 of his authenticated works are contained in the volume *The Complete Works of Nichiren Shōnin*, co-authored by Dr. Hoyo Watanabe and Dr. Hosho Komatsu. This volume is upheld as the standard for present-day research on Nichiren Shōnin. There are about 260 works in the collection that are classified as letters, although some of these are quite lengthy and could be considered as treatises or theses. My purpose for this presentation is to try to classify these letters by purpose and subject.

44. On the Disclosure of the Core Transmission Teachings of the Taiseki-ji School Found in Nichikan's Writings

Mikio MATSUOKA